

建築教育技術支援センター 平成28年度調査・研究助成

「建築と都市に関する学生教育の国際交流支援とその効果に関する調査研究」報告書・梗概

2017年3月

- ・研究代表者：藤田香織（東京大学大学院工学系研究科・准教授）
- ・共同研究者：松村秀一（東京大学大学院工学系研究科・教授）、大野秀敏（東京大学大学院・名誉教授）・安藤正雄（千葉大学大学院・名誉教授）、加藤耕一（東京大学大学院工学系研究科・准教授）、岡部明子（東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授）、菊地成朋（九州大学大学院人間環境学研究院・教授）、趙世晨（九州大学大学院人間環境学研究院・准教授）、柳澤要（千葉大学大学院工学研究科・教授）

## 1. 概要

本研究は、建築・都市の教育に関する日本とEUの大学の比較を行ったものである。過去15年にわたって実施してきた日本とEUの交換留学プログラムAUSMIPを通じて、日本とEUの建築教育の違いと今後の更なる交流を進めるために必要な要件を検討することを目的としている。

2016年7月にEU側の教員が来日しAUSMIPの今後のありかたについてWSを実施し、同年11月には日本側から教員が渡欧し、ベルギー、パリでそれぞれ先方大学との意見交換および模擬授業を実施した。更に、日本・EUの幹事教員が1名ずつ建築雑誌（2016年12月号）の特集「グローバル時代の建築教育と研究」に寄稿し、AUSMIPの成果と今後の課題について論じている。

## 2. AUSMIPについて

AUSMIPとはEU-Japan: Architecture and Urbanism Student Mobility International Programの頭文字を取ったもので、名前が示す通り建築・都市の研究と研鑽のための日本とEU諸国間の教育交流プログラムである。2003年度から現在まで、毎年修士課程の学生の派遣・受入れ事業を継続してきた（合計370名余）。日本側からは、東京大学大学院工学系研究科、東京大学大学院新領域創成科学研究科、九州大学大学院人間環境学府、千葉大学大学院工学研究科が参加し、EU側からはパリ・ラヴィレット国立高等建築学校（フランス）、ルーヴェン・カソリック大学シントルーカス建築及び都市計画学部（ベルギー）、リスボン大学建築学部（ポルトガル）、ミュンヘン工科大学（ドイツ）が参加している。

## 3. 研究会開催（東京）

2016年7月19日に東京大学にて、来日中のEUの学生を対象とした成果報告会と幹事教員による意見交換会を実施した。AUSMIPは過去15年継続して行っており、卒業生の国際的な活躍も見られる。教育プログラムは継続的に実施することに意義があるが何か新しいことを提案する必要もある。近年EUの協定校では大学内での組織編成が行われている。同じ建築・都市関係学部でも、日本とEUの教育方法・内容・範囲が異なる。EU側では日本の建築教育のように構造・材料・環境・設備といった工学的な分野は社会基盤に含まれることが多い。インターンシップは教育効果も高いため、プログラムに適切に取り入れる方法を検討する必要がある。

#### 4. EUの協定校視察・研究会実施

2016年11月に日本側の教員がEUに渡航し、協定校を視察するとともに、ベルギー・ルーバンカソリック大学、EACEA, パリ・ラビレット建築大学にて、今後の教育体制について議論した。

##### ・ベルギー・ルーバンカソリック大学 (Katholieke Universiteit Leuven, KUL)

KULは15のFacultyと複数のDepartmentで構成され、ベルギー国内の11か所に15のキャンパスがあるEU有数の大学。統廃合が繰り返されているためその組織と構成は大変複雑である。AUSMIPでは、2002年からSintLucas建築大学と学術協定を結んで交流してきたが、2013年に同校がKU-Leuvenに統合されたため、現在はKU-Leuvenと学術協定を結びなおした。建築学科では工学的な分野については研究・教育がほとんど行われていないということであったが、今回の渡航の結果、Faculty of Engineering Technology、Faculty of Engineering Science では建築の構造・材料に関する研究が行われていた。特に、既存建築部・歴史的建築物の構造・材料の性能評価に関して、研究が進んでおり今後の交流では学ぶところが多いことが分かった。講義科目等についても詳細に検討した。

##### ・パリ・ラビレット建築大学 (Ecole Nationale Supérieure D'Architecture de Paris – La Ville ENSPLV)

ENSPLV はフランスにある 20 校の建築大学のうち、学生数 2,200 人と最多である。文部省ではなく文化省の下部組織である。研究組織は以下の 6 つの研究チームで構成されている。教員数は 350 名。研究チーム：Architecture History Techniques Territories Heritage ・ Architecture, Environment, Landscape ・ Philosophy, Architecture, Urban Laboratory ・ Architecture, Anthropology Laboratory ・ Work Space Laboratory ・ Modeling Assisting the Cognitive Activity of Conception。

学部 (Bachelor) は 3 年間 (Bachelor Degree)、その後 2 年間で Master Degree (修士)、修士+1 年 (建築士、プロジェクトマネジメントの免許)。それぞれにインターンシップが課せられる。修士 1 年前期だけでも、合計 56 課題 (それぞれに 1~3 名の担当教員) があり、大変多彩な講義が幅広く提供されている。

#### 5. まとめ

過去 15 年間行ってきた交換留学システムの AUSMIP であるが、近年 EU 側の大学の組織改編等に伴い状況が大きく変化していることが分かった。幹事教員同志は毎年渡欧あるいは来日し、緊密に連絡を取ってきたが、本年度は本助成を受けることにより、幹事教員以外の教員との交流を WS などを通じて行うことができ、EU 側大学の現状への理解が深まった。

先方大学の教員との交流から、日本の建築教育に対する関心も高いことが分かった。日本における建築教育は工学系の分野が含まれていることが大きな特徴である。EU 側の建築教育は計画・意匠・歴史系が中心であるが、今回の訪問で建築学部以外で、建築の技術的な側面を研究・教育していること学部・学科があることが分かった。EU の同じ大学内でも従来あまり交流が行われてこなかったため、EU 側にとっては分野横断型の研究・教育への発展に、日本側にとっては研究・教育の交流の幅が広がることが大いに期待できる成果が得られた。